

【原 著】

日本の大学における教養外国語科目としての韓国語教育
—学習者への調査結果をもとに—

朴 珍希

Korean Language Education as a General Study in Japanese Universities
—Based on Survey Results from Korean Language Learners—

Jinny PARK-CRAIG

2017

岡山大学教師教育開発センター紀要 第7号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.7, March 2017

日本の大学における教養外国語科目としての韓国語教育

—学習者への調査結果をもとに—

朴 珍希^{※1}

本稿は、日本の大学での韓国語学習者のニーズを把握し、どのような授業形態と教育が彼らの学習意欲を向上させ、さらに彼らの学習目標の達成に貢献できるのかを把握することを目的とし、岡山県内の大学の教養外国語科目としての韓国語学習者のアンケート調査の結果をもとに、日本の韓国語教育の問題を明らかにすると同時に、今後の韓国語教育をより向上させるための方向性を提示した。方向性の提示では、韓流コンテンツの活用、eラーニングの導入及び活用が学習意欲の向上に寄与するものと示し、また授業以外の学習時間の活用と、言語と文化の同時教育という面から韓流コンテンツは不可欠であることを明らかにした。韓国語教育は、学習者の要望に応える教育方法の研究と教育カリキュラムの確立、また教養外国語教育としての特性に合った教科書の開発と学習者の目標達成が可能となるカリキュラムの確立が必要であることを主張した。

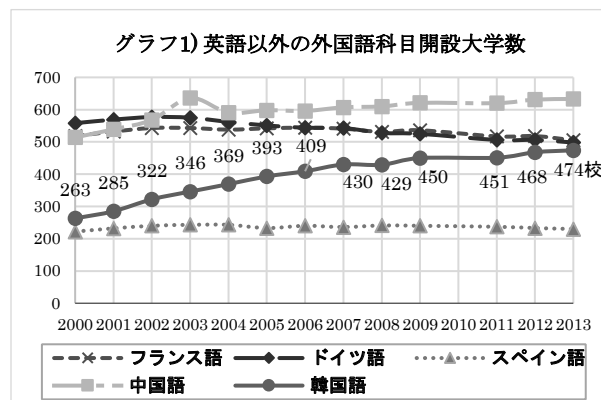
キーワード：韓国語教育，アンケート調査，韓流コンテンツ，eラーニング

※1 岡山大学教養教育非常勤講師

I はじめに

日本で韓流という風が吹き始めてから 10 数年が過ぎている。当時はこのブームについて「一時的な現象であろう」、「長期間持続するだろう」などの意見が出ていたが、「第 1 次韓流ブーム」が落ち着く頃、再び「第 2 次韓流ブーム」が起り、その間韓国語教育を実施する大学の数はもちろん、韓国語学習者の数も爆発的に増加し、日本での韓国語教育が量的、質的に大きく発展するきっかけとなった。

グラフ 1) で、日本の大学が英語以外の教養外国語科目にどのような外国語を開設しているかを見ると、2013 年現在、韓国語は中国語、フランス語、ドイツ語に続き 4 番目に開設大学の多い外国語である。中でもとりわけ韓国語の増加率が際立つ。2000 年以前、韓国語科目が開設された 4 年制の国・公・私立大学については、国際文化フォーラム(2005)で述べられたように、1970 年代は 8 校、1988 年は 68 校、1995 年は 143 校になったが、その 5 年後の 2000 年は 263 校で韓国語を学ぶことができる大学が約 2 倍に増えた。グラフ 1) から分かるように、2000 年以降も韓国語教育が行われている大学は増え続け、2013 年は日本国内の大学全体の 64.2%に相当する 474 校になった。また、日本国内での韓国への関心



(国際文化フォーラム(2005)の2000年の資料と文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室2001-2013年調査資料により作成：2010年度は調査なし)

が高まるにつれ、両国を往来する人もその後 10 数年間着実に増加したⁱⁱ。

筆者はかつて岡山県内の大学における韓国語教育の現状について報告したが(朴珍希(2013))、岡山県内においても同様に韓国語科目が開設された大学の数が増え、1970 年代には 1 校であったが、2005 年は 9 校、2009 年は 12 校に増え、現在に至る。学習者数も大幅に増加し、2005 年は開設大学 9 校のうち 6 校で 745 人、2012 年は 12 校で 3225 人が韓国語

を学習した。岡山県内の大学には、韓国学科設置大学、つまり専門課程はなく、すべて教養外国語科目としての韓国語教育を実施している。

II 先行研究と研究目的

今までの日本の大学における韓国語教育に関する研究は数多くなされているが、学習者ニーズに関する研究が比較的に活発になったのは最近のことであるⁱⁱⁱ。「第2次韓流ブーム」以降から2105年までの研究は다니자키(2012)、심보(2012)、강영숙(2014)、박종후(2014)、오기노(2015)などがある。各先行研究の調査項目のうち、回答者数がもっとも多かった項目を取り上げてまとめると、学習動機はほとんどが「韓流」で、学習目的は日常生活や旅行に役に立つ簡単な「会話能力」を望んでいて、学習目標レベルは「入門」が多い。授業時間以外の学習はほとんど行われていないが、「映像やインターネット」で学習と似たような効果を得ようとしているように読み取れる。一方、韓国語学習時の難しい領域は「発音」が多く、聞き取りを含めてリーディング領域である。学習難易度、韓国語検定試験の受験・留学の希望有無に関する項目は教育内容や教育目標を決めるのに非常に役に立つが、資料は十分ではない。授業の改善点については、「会話中心の授業」で、授業に映像を活用することも好む。

以上、先行研究をみてみたが、調査期間が少し異なるとは言え、ほぼ似たような結果が出ている。

しかし、いくつかの問題点もある。まず、先行研究ごとに設問項目や選定にばらつきがあり、研究結果を一般化することは難しい。さらに学習者が映像媒体を活用した会話中心の授業を好むという結果から学習者のニーズに合わせた授業カリキュラムの再構成や教育方法の見直しを指摘してはいるものの、具体的な教育方法や新カリキュラムの提案などはない。

本稿では、以上の先行研究の結果を踏まえ、岡山県内の大学における教養外国語科目（以下、教養）としての韓国語学習者の学習背景、ニーズなどを把握し、その結果を参考に、今後の韓国語教育と教育方法を向上させるための方向を考察してみたい。

III 学習者アンケート調査内容と方法

本稿の調査は、筆者が講義を担当している岡山県内の大学4校の初級7クラスを対象に2016年7月に実施した。アンケートの内容は、性別、学年、年齢、専攻などを含む基礎項目と、学習動機、学習目的、学習目標など韓国語の学習全般に関する事項、そして学習を通じて得た韓国（人）と韓国語のイメ

ージなど3つで構成した。アンケートに応じた学習者は、留学生を除く18歳から22歳までの合計225人である。調査対象大学の1コマの授業時間は、3校は90分で、1校は120分^{iv}である。

IV 学習者アンケート調査結果

1 基礎項目の調査結果

基礎項目は性別、学年、専攻、韓国滞在経験と韓国語学習経験などについて調査した。本稿で提示するパーセンテージはすべて四捨五入で計算した。

グラフ2)をみると、女子が男子より2倍くらい多く、



グラフ3)では、ほとんど1年生である。

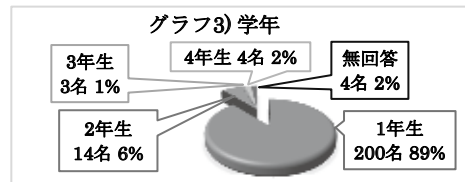
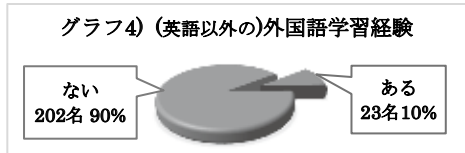


表1)で、専攻は理工系が文科系よりも多い。

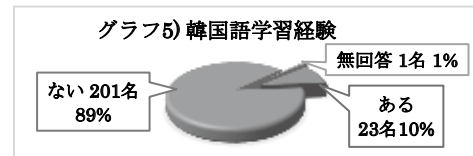
表1) 専攻

O 大学					K 大学	
教育学	経済学	工学	理学	農学	情報工 学	
56 名	34 名	32 名	14 名	5 名	13 名	
25%	15%	14%	6%	2%	6%	
M 大学			S 大学			
食物	児童	福祉	言語 文化	生活 心理	看護	合計
21 名	14 名	12 名	10 名	6 名	8 名	225 名
9%	6%	5%	5%	3%	4%	100%

グラフ4)で、学習者のほとんどは英語以外の外国語を勉強したことがなく、



グラフ5)で、学習者のほとんどは大学入学前に韓国語を学習したことはないことが分かる。

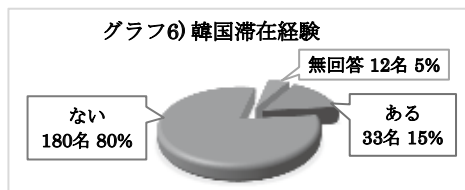


大学入学前の学習経験者の学習形態は、表 2) のように、正規教育課程では 3 名に過ぎず、ドラマ・映画、歌(K-POP)など韓流コンテンツが多かった。

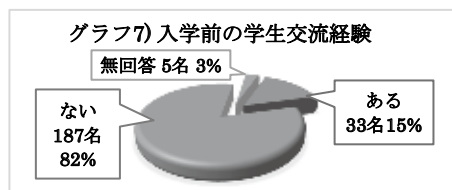
表 2) 韓国語学習経験者の韓国語学習形態

小中高	塾など	独学	歌(K-POP)
3 名	0 名	3 名	7 名
マンガ	ドラマ・映画	韓国人との交流	合計
1 名	8 名	1 名	23 名

グラフ 6) では、学習者の 80%が大学入学前に旅行、交換プログラムなどを通じての渡韓経験はなく、



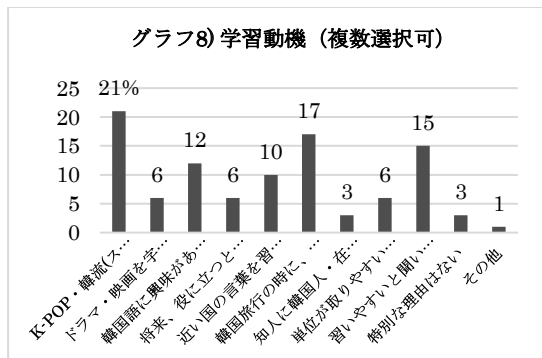
グラフ 7) では、学習者の 80%以上が大学入学前に旅行、韓国の学生と交流したことがないと答えた。一方、韓国の学生との交流経験のある学習者 15% (33 名)のうち 70%(23 名)は韓国の学生との交流経験が韓国語学習のきっかけになったと答えた。



2 韓国語学習者のニーズ

(1) 韓国語の学習動機

<質問：韓国語の学習動機は何ですか。>



グラフ 8) で、学習者が韓国語を選択した動機は、留学や進学などの「学問目的」や就職などの「特別目的」を考えて韓国語を学習するよりも、韓国の大衆文化、特に「K-POP・韓流(スター)」に興味があるので(21%)、「ドラマ・映画を字幕なしでみたいので」(6%)という韓国文化コンテンツに関する総合的

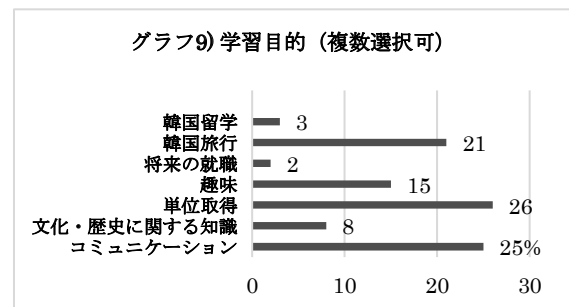
動機が多いという点は注目すべきである。約30%の学習者が韓国の大衆文化に関わる項目に関心を持っているという事実は、先行研究でも明らかになっていたように、韓流コンテンツが日本の大学の学習者には「第2次韓流ブーム」が過ぎた現在でもまだ身近な存在であることを示している。大学の教養としての韓国語教育では、この点を深く認知しなければならず、さらに、韓流コンテンツは学習者の学習意欲を高め、より高い学習効果を図る媒介体として利用されることが望ましい。

また、「韓国語に興味があるので」(12%)、「近い国の言葉を習いたいの」(10%)のように韓国語自体に関心がある学習者が全体の22%を占めている。韓国語そのものに関心を持ち韓国語の学習を始めるということは教養としての韓国語教育で何よりも重要な学習動機であると言える。その他には、「修学旅行で韓国へ行った時楽しかったので」、「留学してから最終的には韓国へ移住したいので」などがある。

(2) 韓国語の学習目的

<質問：韓国語の学習目的は何ですか。>

グラフ 9) で、韓国語を学習する目的は卒業のための「単位取得」を優先的に考えている学習者が最も多いが、全体的には、「将来の就職」や「韓国留学」という実利的な面より、「コミュニケーション」、「韓国旅行」のような日常生活に役立つ会話能力を目的とする場合が多い。

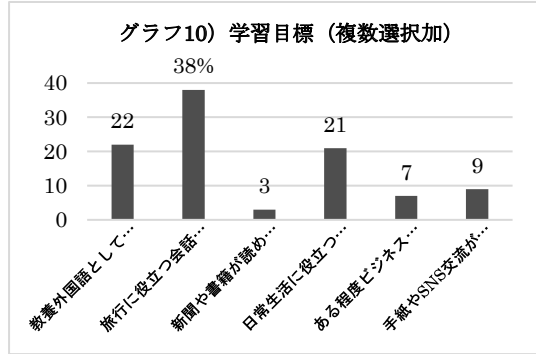


外国語の授業といえば、一般的にコミュニケーション能力と結びつける場合が多く、韓国語を教養として学習した場合、韓国語の授業に期待されるのはコミュニケーション能力とどのように上手く韓国語で表現できるかという実用性に価値を置くので、将来の就職や韓国留学のような道具的な学習目的はあまり高くない。

(3) 韓国語の学習目標

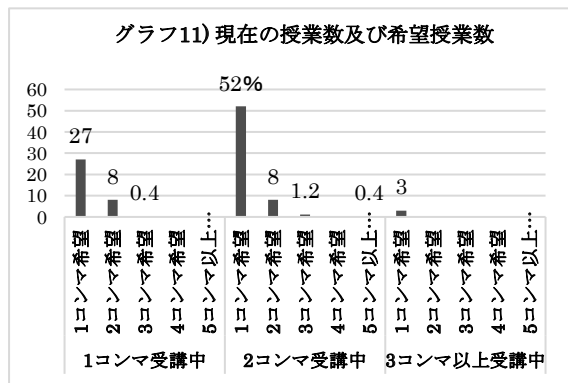
<質問：韓国語の最終学習目標は何ですか。>

グラフ 10) でみるように、学習目標については「旅行に役立つ会話能力」が 38%と圧倒的に高く、「教養外国語としての基礎知識程度」が 22%、「日常生活に役立つ会話能力」と答えた学習者が 21%を占めることから、学習者の大部分が「会話能力」を目標にしていることで、上記の「学習目的」と変わらないことが分かる。



(4) 現在の授業数及び希望授業数

ここでは、現在の授業数及び希望授業数についてみる。グラフ 11) で、韓国語の授業を週 2 コマ受講している学習者は 60%以上で最も多いが、週 1 コマが適当であると回答した学習者は約 80%である。ここでも同じく、学習者は学習目的・目標として日常生活に役立つ「会話能力」を求めているのにもかかわらず、韓国語の学習自体への期待値はあまり高くない状態である。さらに、教室を出ると韓国語を使うところもほとんどない環境の中で、週 1 コマだけの学習で、彼らの学習目的及び学習目標は叶えられるのか、という疑問が生じる。

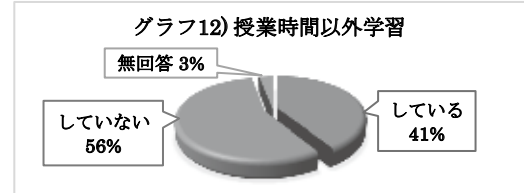


前述したように、日本の大学学習者の韓国語学習の目標や期待値はそれほど高くはない。専攻課程の学習の場合には、専攻の授業についていくために、学習者自らも授業以外の時間を投資して、自分の能力を向上させる努力をするが、教養として韓国語を学ぶ学習者のほとんどは、ただ単位が取ればいい

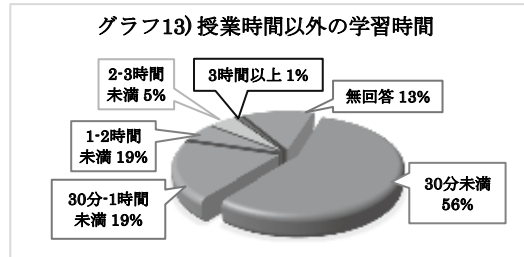
という考えが根底にあるように思われる。

(5) 授業時間以外の学習状況

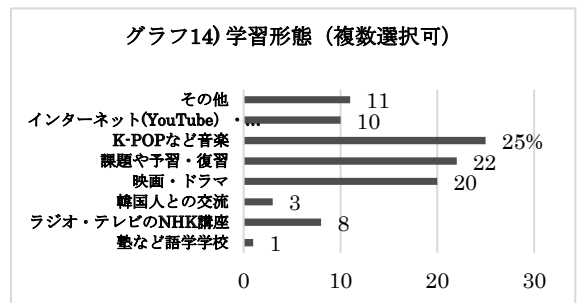
ここでは、授業時間以外の韓国語学習状況についてみる。グラフ 12) で授業時間以外に自分で勉強する学習者は半分以上にとどまり、



グラフ 13) で、そのうち授業時間以外の学習に費やしている時間は30分以内であると答えた学習者が半分以上である。また、学習者の75%が週1時間も韓国語学習に投資していないことから、韓国語学習者は授業にのみ参加する場合が多いことが分かる。



そこで、学習者の学習意欲を高め、学習目標の期待値を高めると同時に学習効果を出すためには、授業時間以外の学習時間を増やさなければならない。続いて、授業以外時間の学習形態についてみると、グラフ 14) では、「K-POP など音楽」が最も多く、「課題や予習・復習」、「映画・ドラマ」の順になる。学習者の過半数が「K-POP などの音楽、映画・ドラマ」という韓流コンテンツを利用することは、韓流コンテンツが韓国語学習にも深く関与していることを示している。



この結果からは、学習者が韓流コンテンツを利用して、ただの韓国文化関係の映像を見ているのか、学習をしているのかまでは分からないが、これを参考に、このようなメディアの視聴が学習につながる

ようにするためのカリキュラムが必要であると思われる。その他の学習形態としては、「小テストの勉強」、「外部の検定試験勉強」などがある。

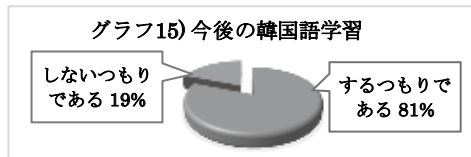
以上のように、授業時間以外の自己学習を行わない韓国語学習者に、授業以外の学習環境の改善とともに学習成果の質的な向上を図るためには、「韓流コンテンツ」と「課題」をどのように結び付け活用するか、ということについて考えなければならない。

先行研究でも言及されていたように、K-POP、映画・ドラマなどの韓流関連の映像媒体は、学習者の視覚・聴覚を刺激すると同時に、興味を誘発させることで、より積極的な授業への参加を誘導するだけでなく、授業外の学習にも積極的に参加できるきっかけを作ってくれるだろう。

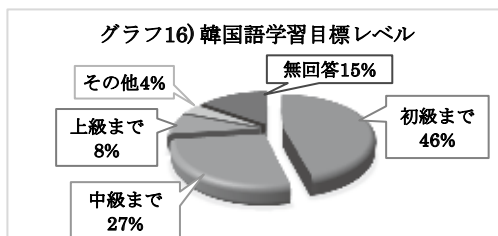
このように、授業や授業以外の学習への意欲を増進させるためには、まず、学習者自ら勉強できる環境を作ってあげ、学習者の学習動機・目標を詳しく把握した上で、さらに、その学習目標を基にした柔軟、かつ、明確なカリキュラムを設定し、学習者が達成感を感じる韓国語教育を考慮するべきである。

(6) 今後の学習計画

ここでは今後の韓国語学習計画についてみる。



グラフ 15) では、80%以上が「今後も学習するつもりである」と答え、グラフ 16) の韓国語目標学習レベルについては、「初級まで」が 46%と最も多く、「中級まで」が 27%と答えた。その他の内容としては、「最上級まで」、「会話をすることができるようになるまで」がある。



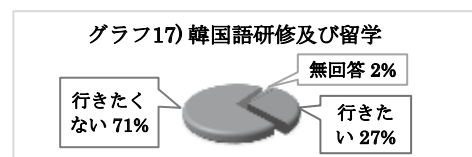
学習目的について 26%の学習者は「単位取得」と答えたが、今後の学習について消極的な学習者 19%は、単位が取れてしまえばそれ以上学習を続ける必要性を感じていないようである。

岡山県内の大学での韓国語科目は、通常、最初の 1 年課程は初級、初級学習後の 1 年間は中級、中級学

習後は上級と分けている場合が多い。ところが、調査対象の大学 4 校のうち中級課程を設置している大学は1校のみで、他の 3 校には初級を終了した後は、もはや大学では韓国語教育を受けることはできない。そして中級課程を設置していない大学で初級を修了した学習者が毎年のように 2~3 年生になっても韓国語の学習を続けたいと中級課程の開設を求めているが、大学の経済事情、収容人数の問題などでこの要求はまだ反映されない状況である。

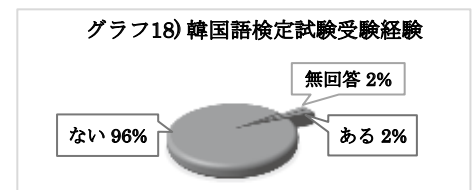
① 韓国旅行と韓国語研修・留学に関する事項

ここでは、韓国旅行と韓国語研修及び留学についてみる。韓国旅行についてはほとんどの学習者は将来韓国へ旅行に行きたいと答えた。しかし、グラフ 17) で韓国語研修や留学については、「行きたい」と答えた学習者は 30%未満である。この結果から、地理的な隣接性による文化的関心と親しみやすさのために、気軽な旅行には肯定的であるが、真剣な学習を必要とする韓国語研修や留学については消極的であると言えよう。

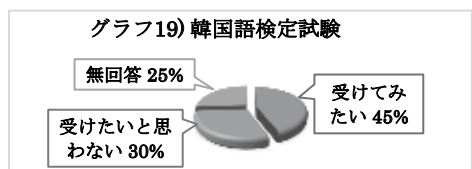


② 韓国語検定試験について

次に、韓国語検定試験についてみる。グラフ 18) で、学習者の大半が韓国語検定試験に受験した経験がないのは、学習者のほとんどが 1 年であり、大学入学後学習始めたばかりで、当然であろう。



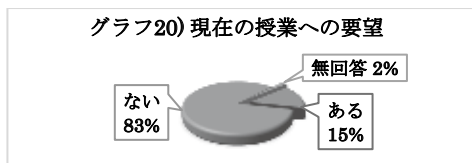
一方、グラフ 19) では将来、検定試験を受けたいと答えた学習者は 45%で、検定試験の受験を韓国語研修や留学よりも好むことが分かった。県内の大学のうち 1 校が外国語能力試験合格者に単位を付与している。韓国語の場合、韓国語能力試験初級 I・1 (TOPIK I・1) 合格者には 4 単位、初級 I・2 (TOPIK I・2) 以上の合格者には 8 単位を付与している。



しかし、将来、韓国語検定試験を「受けてみたい」という学習者が学習者の約過半数を占めるが、現在大学 4 校のうち韓国語検定試験対策班などそれに応じた科目を設置している大学は 1 校もない。

(7) 現在の授業への要望

学習者が現在の授業方式に満足しているかどうか、授業に対する要望を調査した。グラフ 20) で、ほとんどの学習者は現在の韓国語の授業に対する要望は特に「ない」と答えた。



授業への要望が「ある」と答えた 15%の学習者の要望をまとめると表 3) のようになる。

表 3) 現在の授業への要望事項

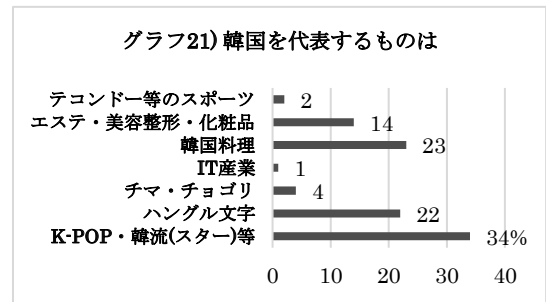
- ・ K-POP を利用した勉強をもっとしたい
- ・ 韓流ドラマを見て翻訳してみたい
- ・ 旅行先をもっと紹介してほしい
- ・ ドラマ視聴時間を増やしてほしい
- ・ 異文化理解の時間を増やしてほしい
- ・ (韓国語での) 単語ディクテーションをしたいと思う
- ・ 実際に韓国人と交流したい
- ・ 韓国料理を作って食べてみたい

内容は韓国文化と韓流コンテンツに集中している。韓流コンテンツをもっと授業に反映してほしい、韓国文化にもっと触れたいという意見が多数である。

このような要望を少しでも叶えてあげるための一つの方法を、5 章で取り上げて提案する。

3 韓国 (人) 及び韓国語に対するイメージ

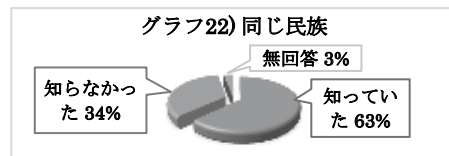
ここでは、韓国 (人) と韓国語についてどのような印象を持っているのかについてみる。まず、グラフ 21) の「韓国を代表するものは何ですか。」という質問に「K-POP・韓流 (スター)」が最も多く、「韓国料理」、「ハングル文字」、「エステ・美容整形・化粧品」の順になった。伝統衣装であるチマ・チョゴリが 4%にとどまった一方で、「エステ・美容整形・化粧品」、つまり美容に関係する項目が 14%を占めたのは興味深い。韓流ブームでメディアコンテンツだけでなく、韓流スターとの関連項目も幅広く関心の対象になるということが分かる。続いて、韓国と北朝鮮に関する調査結果についてまとめる。



(1) 認識の程度

まず、韓国語学習前の韓国と北朝鮮の民族と言語に関する認識の程度を調査した結果である。

グラフ 22) で韓国と北朝鮮が「同じ民族」であることを「知っていた」と答えた学習者は 63%である。

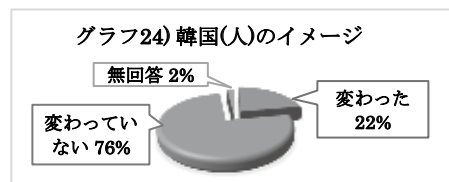


一方、グラフ 23) で韓国と北朝鮮が「同じ言語」を使用していることを「知っていた」と答えた学習者は、48%にとどまった。



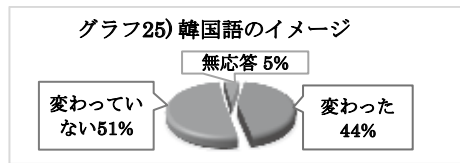
以上で、日本人学習者は隣国への関心はあるものの、隣国に対する知識はあまりないことが分かる。韓国語教育を通じて韓国の社会と文化についての教育も疎かにしないで、言語と文化の同時教育をするべきであることを如実に見せている一例である。現在の韓国語の授業は時間的に言語と文化の同時教育は余裕がないかもしれないが、5 章で取り上げる e-ラーニングシステムの利用で問題は解決できるだろう。次は、学習後のイメージ変化についてみる。

(2) 学習を通じたイメージ変化



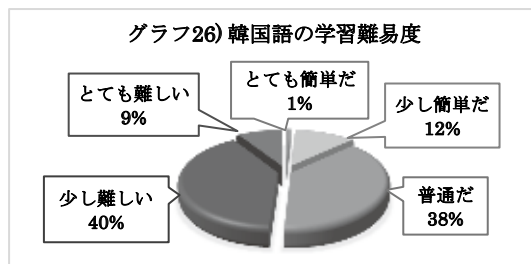
グラフ 24) で、韓国語の学習後「韓国 (人) のイメージが「変わった」と答えた学習者は 22%であり、グラフ 25) で、韓国語の学習後「韓国語のイメージが変わった」と答えた学習者は 44%で、韓国語に対

するイメージ変化の割合が大きいことが分かる。韓国（人）・韓国語のイメージは肯定的な変化の割合が高く、特に変化内容には異文化に関する項目が多い。

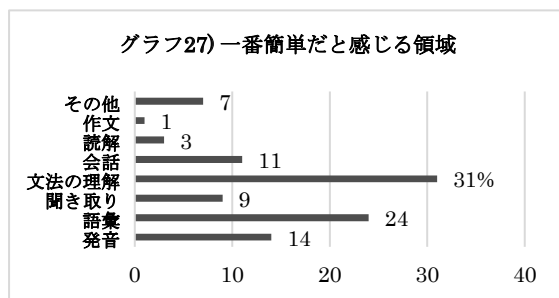


(3) 韓国語の学習難易度

ここでは、学習を通じて学習者が感じる韓国語の学習難易度についてみる。



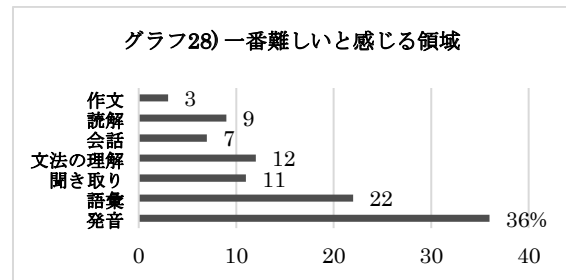
グラフ 26) では、過半数以上の学習者が韓国語学習は、「普通」または「簡単だ」と感じていることが分かった。予想通り、日本語母語話者の学習にとって韓国語学習はそれほど困難ではない言語である。韓国語学習の動機を尋ねた質問で「習いやすいと聞いたので・周りから勧められて」、「単位が取りやすいと思うので」がそれぞれ 15%、6%であったことから、韓国語は学習後 2 倍以上の学習者が簡単だと感じていることを分かる。それでは、韓国語の学習において、学習者にどの領域が最も簡単で、どの領域が最も難しく感じるのかについて調べる必要がある。



グラフ 27) で、最も簡単だと感じる領域は、予想通り「文法の理解」である。一方、グラフ 28) で最も難しいと感じる領域は、「発音」である。

韓国語難易度に関する結果は、日本語と文法体系と語彙の類似性が最大の理由であることでも、6 ヶ月未満という短い学習期間での幅広い学習ができていない状態で、韓国語と日本語との音韻論的な

差異が影響を与えていると思われる。よって、教育者は学習者が最も難しく感じる領域により多くの時間と労力を投資すべきである。



日本の大学における教養外国語科目としての韓国語教育は、学問の目的や業務上の目的ではないので、文法中心の教育ではなく、日常生活に役立つ会話能力を育てるための会話中心の教育が優先されるべきである。そして、学習者が難しいと感じる領域を補完した授業内容が学習者に自信を高めると同時に、会話能力の向上を図ることができ、学習者が韓国（人）と韓国語に感じる印象を参考にして授業に活用すれば、はるかに高い学習効果が期待できるとと思われる。

V アンケート調査結果からの課題

1 アンケート調査結果から見えたもの

これまでにみたように、岡山県内の大学での韓国語学習者の学習動機と学習目的は多様である。特に、韓流コンテンツにかかわる項目が多い。韓流は「第 2 次韓流ブーム」が過ぎた現在でも韓国語学習者の学習動機に大きな影響を与えていることが確認された。

一方、学習者の学習到達目標はあまり高くない。旅行や日常生活に役立つ簡単な会話能力を目指す学習者が多く、今後の韓国語学習希望率は高いものの、到達希望レベルとしては過半数が「初級」を希望し、韓国語の授業にはより多くの韓流コンテンツの導入を求める程度である。将来の韓国語研修や留学にもメリットを感じられないようである。

授業時間以外の学習状況は、自分で勉強する学習者は少なく、学習時間も週 1 時間未満であるが、学習形態としてはほとんどが「韓流コンテンツ利用」と「宿題」という点で、韓流コンテンツは現在の韓国語学習においても欠かせない存在である。

日本人学習者にとって韓国語学習は全体的に大きな困難を感じるほうではないが、初級学習者には（音読時の）発音と語彙というリーディング領域に対する習得の難しさがある。また、隣国への興味・関心はあるものの、知識はあまり高くない。学習を通じて

韓国（人）及び韓国語のイメージは肯定的な変化の割合が高く、特に変化内容には異文化に関する項目が多いのも特徴である。

それでは、以上のような韓国語学習者のモチベーションを高め、効果のある教育をするにはどのような点を注視すべきであろうか。今までの研究では、学習者調査結果を通じて日本の韓国語教育の問題については指摘があるものの、実際の授業にどう反映すべきかなどについてはあまり研究されていない。

ここではまず、以上の調査結果を踏まえ、これを支えるカリキュラムや教育方法について考えなければならない。次の2節では、学習者の学習意欲を高め、学習目標を達成させるための具体的な一つの教育方法を提案する。

2 学習者中心教育への試み

効率的な言語教育のための最も重要なものは、学習者の学習動機、学習目標、学習要望などの調査を基にした学習者中心(learner-centered)の教育課程の設定であり、学習者中心の教育課程の設定は目的別、国別、対象別に差がなければならない。従って、日本の大学における教養としての韓国語教育は、学門目的や特殊目的の教育とは異なるカリキュラム、教育内容(syllabus)などを設定する必要があり、教育方法も変わらなければならない。

(1) eラーニングシステムを導入した教育

筆者が担当する大学の授業は、大学ごとに教材が異なり授業の方法も少々異なりはあるが、基本的には学習者同士が会話練習をするペア活動やグループ活動、メディアを活用した音響教育と異文化理解のための文化教育といった言語と文化が共存する複合的な授業形式である。そして、オフィスアワーなど授業外の時間は、韓国語検定試験や韓国語スピーチ大会・発表会などに挑戦する学習者を指導することがある。他に K-POP の歌詞や韓国ドラマのセリフ、韓国のアーティストへのファンレター、韓国人との文通の手紙、韓国語の日記などのネイティブチェックを求められる場合もある。

しかし、4 大学で教えている筆者の場合、学習者の授業外の時間の学習や活動を十分支援することができないことがある。日本の大学の韓国語教育者の多くは、筆者のように複数の教育機関での授業を持ち、筆者のような問題を抱えているだろう。そこで筆者は、学習者の授業時間外の学習などを支援するため

に、電子機器を利用した e ラーニングシステムを授業に導入し活用した。e ラーニングシステムは、情報技術の発展により超高速通信網の利用率が増加したデジタル時代の学習者がコンピュータだけでなく、様々なモバイル端末で利用することができ、時空間を超え学習者自らの学習が可能であるという長所がある。e ラーニングシステムの利用は、教育者が e ラーニング支援室を通して科目登録をした後、それぞれのコンテンツ登録をすると、登録された科目を受講する学習者が利用できるようになる。

ここでは、筆者が韓国語教育に導入・活用した e ラーニングの内容及び e ラーニング活用結果をもとに、韓流コンテンツの活用・e ラーニングの導入及び活用を韓国語教育における学習者中心教育の一つの方法として提案したい。e ラーニングで実施した学習支援は以下の通りである。

- i 各授業の資料配付
- ii 自習用（自動採点）テスト実施
- iii 文化授業の内容配布
- iv レポート出題・管理
- v チャート室運営・管理
- vi オンライン韓国語学習サイトの紹介と資料配付
- vii 韓国語検定試験に関するデータ配付
- viii 韓国関連サイトの紹介（観光、ショッピングなど）

i の各授業の資料は、テキスト以外のハンドアウトをコンテンツとして登録しておく、学習者は時間・場所にこだわらず自由に予習・復習ができる。

ii の自習用試験は、iii の文化授業の内容とかかわりがある。例えば、4minut のミュージックビデオ「名前は何ですか(이름이 뭐예요?)」をコンテンツとして登録すると、学習者はコンテンツの視聴後、自習用テストを実施する、という方法である。学習者は次の手順で e ラーニングを利用ようになる。

1) ミュージックビデオを視聴する。

2) 自習用（自動採点）試験実施

ミュージックビデオの視聴後、以下のような項目の自習用テストをする。

・質問 1: 「「뭐예요?」は何回出ましたか。」

回答: 正しい数字を選ぶ。(選択式)

・質問 2: 「「名前」の意味の韓国語は何ですか。」

回答: 正しい韓国語を選ぶ。(選択式)

・質問 3: 「「何ですか」の意味の韓国語を書きなさい。」

回答: 韓国語で書き入れる。(記述式)

3) (教育者は) 学習者のテスト結果確認及びフィード

バックする。

このように、「電話番号(전화번호)」、「どこですか。(어디예요?)」など、ミュージックビデオに出てくる他の表現も同じやり方でできるので、一本のコンテンツで様々な自習用テストができる。自習用テストは自己採点が可能で、即時テストの結果が分かる。何度も再チャレンジができる。

このような韓流コンテンツの活用と e ラーニングによる学習方法は、学習者の学習意欲はもちろん、聞く、読む、書く、話す能力の学習効果の他に、集中力・記憶力も向上される。さらに、学習者が自身の学習能力を認知し、自分に合う学習方法を探し出すことにもつながる。「次はどのようなコンテンツが登録されるだろう」という学習者には予測の楽しみも与えることになる。「授業以外の学習状況」で「授業以外の学習形態」はほとんど「韓流コンテンツ」と「宿題や予習・復習」であったことも踏まえ、学習者がただの韓国文化関係の映像を視聴するようにコンテンツだけを与えるのではなく、以上のように「授業以外の学習」を兼ねた映像視聴になるように工夫すべきである。

また、iv のレポートの場合は、韓国の伝統スポーツのテコンドーの映像をコンテンツとして登録し、次のような手順でレポートを提出する。

1) コンテンツを視聴する。

2) レポートの提出

コンテンツの視聴後、簡単なレポートを提出する。

・質問 1: 「テコンドーはどんなものですか。」

レポート: 回答欄に書く。(記述式)

・質問 2: 「テコンドーのようなものはあなたの国にもありますか。もしあるとしたら、どんなものですか。それはなぜそう思いますか。」

レポート: 回答欄に書く。(記述式)

3) (教育者は) 学習者のレポート提出確認及びフィードバックする。まとめをチャート室にアップし、学習者同士の自由な討論活動を支援する。

このように、衣食住の文化、観光地、スポーツなど様々なテーマでの「文化教育」が可能である。

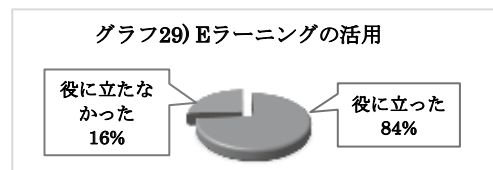
上記のような学習・活動支援は、e ラーニングを通じて配布した資料や教材での学習者自らの学習が可能で、1 対 1 のチャットを通じたコミュニケーションで学習者と教育者がいつでもどこでもコミュニケーションをとることができるとともに、時空間を超えた追加学習支援が可能になる。また、自由なコミュニケーションを通して学習者のニーズが把握で

き、学習に動機を与えながらフィードバックをすることによって、より効果的な学習環境を提供することができる学習者別の教育支援が可能になる。さらに自習用のテスト実施で学生の理解度の確認ができ、教育者と学習者間の距離も縮まる。

このように、学習者自らの学習ができる姿勢と意欲を持たせることは、学習成果の向上に直結すると言える。

(2) e ラーニングシステムの活用満足度

ここでは、e ラーニング活用に対する満足度を調査した。グラフ 29) で、e ラーニングの学習への導入・活用が学習成果につながり、「役に立った」と答えた学習者は 84% を占めす。すでに見てきたように、e ラーニングシステムは一方的な課題提供を超え相互作用学習であるため、教育者が提示するものをただ受けるだけではなく、学習者が直接資料を探して分析するという能動的な活動が可能になるという点で、学習者に学習しやすい環境を提供すると言える。



今後、韓流コンテンツと e ラーニングシステム活用を通じて、韓国語教育の授業の延長線で、学習動機と学習満足をもたらすことができる、より多様で効果的なコンテンツの開発と学習環境提供に関する研究が必要であろう。

VI おわりに

以上、日本の大学における教養としての韓国語教育についてみてみた。特に、岡山県内の大学の例を中心に学習者ニーズを分析し、学習者の学習意欲を向上させる学習者中心教育を目指すために、韓流コンテンツと e ラーニングシステムの韓国語教育への活用を韓国語学習に寄与できる方法の一つとして提案した。韓流の人気による韓国語教育がいつまで維持されるのか予測はできないが、学習者の学習意欲を引き起こし、楽しく、かつ、達成感が感じられる韓国語教育にするためには、関連するコンテンツの導入など柔軟性のあるカリキュラムにより、学習者のレベルに応じた学習環境が造成されたコミュニケーション能力と学習者中心の韓国語教育を目指すべきである。そのような面で韓流コンテンツと e ラーニングシステムの導入・活用という独自の方法的

教育は、授業の延長線で学習者の学習意欲を高めることへの一助となるに違いない。

本研究の対象は、岡山県内の大学に限定したため、日本全地域に拡大して適用させるには限界があるが、現在の大学の学習者を対象にしたアンケート調査が不足している状況で、今後の日本の韓国語教育の状況把握に実質的な参考資料となることを願う。

大学と高等学校における韓国語教育の比較、レベル別の学習者調査などは、今後の研究課題としたい。

参考・引用文献

国際文化フォーラム(2005), “日本の学校における韓国朝鮮語教育-大学等と高等学校の現状と課題-”, 財団法人国際フォーラム

朴珍希(2013)「外国語としての韓国語教育の現状と展望-岡山県内の大学・高等学校を中心に-」『朝鮮語教育-理論と実践-』第8号, 朝鮮語教育研究会 pp.74-88

高等教育局大学振興課大学改革推進室‘大学における教育内容等の改革内容について’,(2001年～

2013年),文部科学省

<韓国語>

강영숙(2014), ‘일본 대학의 한국어교육에 관한 연구’, “일어일문학연구” 89-2, 한국일어일문학회 pp.365-383

타니자키 미즈코(2012), ‘일본 대학교 한국어 문화 교육의 현황과 과제’ 제2외국어교육으로서의 한국어교육을 중심으로-, “언어사실과 관점” 30, 연세대언어정보연구원 pp.209-230

박종후(2014) ‘일본 대학에서 비전공 한국어교육의 현황조사’, “언어와 문화” 10-3 한국언어문화교육학회 pp.119-139

심보 토모코(2012), ‘일본 대학교 교양외국어 과목으로서의 한국어교육의 과제’, “한국언어문화교육학회 제7회 국제학술대회 발표집” pp.89-96

오기노 신사쿠(2015), ‘일본 대학내 교양으로서의 한국어교육 발전 방향 연구’, “제 25 차 국제학술대회 발표집”, 국제한국어교육학회 pp.155-194

ⁱ 2004 年から 2005 年頃までの期間を「第 1 次韓流ブーム」、2009 年から 2011 年頃までの期間を「第 2 次韓流ブーム」という。

ⁱⁱ 韓国観光公社の調査「韓国観光統計出入国別月別統計」によると、渡韓した日本人は 2003 年の 180 万人から 2013 年の 352 万人に約 2 倍増加した。
(<https://kto.visitkorea.or.kr/kor/notice/data/statis/profit/board/view.kto?id=423699&isNotice=true&instanceId=294&rnum=0>)

日本政府観光局(JNTO)の調査「総計データ (2003-2016 年訪日韓国人)」によると、訪日韓国人は 2003 年の約

146 万人から 2013 年の約 450 万人に 3 倍以上増加した。
(http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/since2003_tourists.pdf)

ⁱⁱⁱ 오기노(2015)では、日本人の学習者を対象にした韓国語教育に関連する研究のうち、学習者ニーズ分析に関する研究数は、1980 年代から 2007 年までは 3 本で、2008 年から 2014 年までは 7 本になる、と引用している。

^{iv} O 大学は 2016 年 4 月から 1 コマの授業時間を既存の 90 分から 60 分×2 回に変更しているが、本稿では 1 コマと数える。

Korean Language Education as a General Study in Japanese Universities

- Based on Survey Results from Korean Language Learners -

Jinny PARK-CRAIG*1

This paper clarifies by analyzing the problems of Korean language education as a general foreign language taught in Japan based on survey results from Korean language learner questionnaires at a university in Okayama Prefecture. The future Korean language education utilizes learning time other than by lessons of introduction and uses Hallyu content, e-learning and to study the educational method of concurrent education of language and culture, as well as establishing a new curriculum.

Keywords: education of the Korean language, questionnaire survey, Hallyu content, e-learning

*1 Okayama University part-time lecturer